



Preview 横尾忠則展 カット&ペースト 切った貼ったの大立ち回り



2015年4月18日(土)～7月20日(月・祝)

横尾さんの作品では、イメージを本来の場所から引き剥がし(cut)、新たな文脈へと投げ込む(paste)、いわゆる「コラージュ」的な手法が多用されています。それは横尾さんの出自がグラフィックデザイナーであったことと無関係ではありませんが、作家自ら「生きることはコラージュそのものかも知れない」と語っており、「コラージュ」は単なる一技法の域を超えて、もはや横尾芸術における思想的な支柱となっています。そういう意味では、あらゆる横尾作品に「コラージュ」的な要素を認めることができますが、本展ではそれが最も先鋭的かつ直接的なカタチで現れた'80年代末～'90年代初期の時期にあえて着目します。'80年代末、切り裂いたキャンバスを重ね合わせた、いわゆる「多次元絵画」により物質的かつ重層的な絵画空間を追求していた横尾さんですが、'90年代に入るとそれらを同一平面上に展開することで、まるで万華鏡のような華麗なイメージを現出させるようになります。さらに1993～94年には、コンピューター・グラフィックによる作品が集中的に制作され、イメージは仮想空間において文字通り過剰なまでにカット&ペーストされます。本展では、このように「コラージュ」をめぐる造形的な実験性が先鋭化し、その展開のうえで最もドラマティックな時期のひとつである'80年代末～'90年代初期に着目することで、横尾芸術の本質に肉薄することを試みます。

山本淳夫 | 本館学芸課長

《見える助力者》1989 | 作家蔵(横尾忠則現代美術館寄託)

Column 《来迎図》顛末記



「Y+T MOCA セレクション」展示中の《来迎図》

「横尾忠則 大涅槃展」の開催にあわせて、所蔵品紹介のコーナー「Y+T MOCA セレクション」で展示することになった《来迎図》。しかし、この作品は、電気系統の修理など、大掛かりな処置を必要としていました。画面3ヶ所に取り付けられたフラッシュライトは、うち一つが欠損。さらに、裏面に3ヶ所スピーカが設置されていて、音が出るらしいことは分かったのですが、音源はすでに失われていました。そこで、過去の資料を調べるとともに、横尾さんに聞き取り調査を実施。そこから、①欠損したライトは青色であること、②カーン! という金属音にあわせて、各々のライトが発光することが判明しました。音(+光)のタイミングは、「作品の前に立ったお客さんが、突然の音にびっくりするように」という横尾さんの(悪戯な?)意向から、③ある程度の間隔をあけて、ランダムに鳴るよう調整することに。修理にあたっては、作品としての「効果」をオリジナルの状態に保ちつつ、それを生み出す「手段」(機器)を、いかに現代のテクノロジーに置き換えていくか、考えながらの作業となりました。幸い、欠損したライトは類似製品と交換することができ、失われた音は、スタッフが新しい音を調達して、音源に充てました。劣化していたスピーカも交換し、音と光が連動するよう調整を施せば、完成です。こうした修理が可能なのも、作者＝横尾さんと相談してすすめていければこそのこと。今後も同様のケースの作品修理につなげていきたいと思ひます。

林 優 | 本館学芸員

EVENT REPORT 01 ピンホールカメラでコラージュ写真

2014年11月15日(土) 13:30-16:30 | 当館 オープンスタジオ(1F)

手軽に作れるカメラに大人も子ども大はしゃぎ!



どんなアングルがいいか思案中…

初めて見る昔のカメラに興味津々



カメラに仕込んだスパンコールの影が神戸の街にコラージュされています

当館初の写真展に合わせて、カメラの原理を学ぶワークショップを開催しました。

まずは、カメラの元祖であるピンホールカメラを体験。しかし、穴が小さいため、ぼんやりとした像しか見えません。次に、穴を大きくしてレンズをつけてみると…「すぐくはっきり見える!」と大人も子ども大はしゃぎ。レンズが光を集めることで明るいくっきりした像が結ばれるのです。カメラの仕組みを学んだところで、次は牛乳パックを本体にした簡易カメラを自作して、神戸の街を撮影しました。

このカメラは露光に時間がかかるので、その間は横尾さんとほぼ同年(!)の貴重なカメラを見たり、作品を鑑賞して過ごしました。学芸員の解説を聞いて、皆さんますます「写真」というものに興味わいてきたようでした。

そしていざ現像の時間。ピントの合わせ方や光の当り具合でいろんな写真が出来上がりました。現像するまでどんな写真になるのか分からないワクワクする気持ちや、偶然生まれたポケ具合が面白い、アナログカメラならではの醍醐味を感じてもらえたのではないのでしょうか。

作花麻帆 | 本館学芸員補助

EVENT REPORT 02 林英哲ライブ「Y氏と迷宮の鼓美術少年」

2014年11月30日(日) 19:00-20:30 | 当館 オープンスタジオ(1F)



和太鼓によるドラムセット(?)



一糸乱れぬアンサンブル!

昨年11月30日、日本を代表する和太鼓奏者、林英哲さんのライブが開催されました。これまで林さんはマン・レイ、伊藤若冲、藤田嗣治などの美術家をテーマにしたコンサートを手がけており、2013年には、シリーズ第6弾として、我がが横尾さんを取りあげた「迷宮の鼓美術少年」を世田谷パブリックシアターで上演しました。来場した横尾さん、大迫力の演奏からエネルギーをもらったのか、ずっと調子の悪かった左足がコンサート後にはすっぴり良くなっていったとか。

実は林さん、横尾さんとは深い因縁があります。若い頃グラフィックデザイナーを目指していた林さんは、ある日、横尾さんの講演会を聴講しにはるばる佐渡島まで出かけました。ところが、諸般の事情で横尾さんの講演は中止になってしまいます。無駄足になったかと思いきや、このとき、佐渡に職人大学創設の理想を掲げた青年運動の立ち上げに誘われた事が、「佐渡鬼太鼓」創設につながり、太鼓奏者への道を歩むことになったのです。今回、会場の制約もあり、世田谷パブリックシアターと同じスケールでの上演は無理でしたが、それでも大太鼓の迫力は圧倒的です(振動でミュージアムショップのグッズが落ちこちるほどの強烈さ)。ものすごいエネルギーの波動を全身に浴びながら、横尾さんの足が治った、というもあり得るかも…… と思っただけでした。

山本淳夫 | 本館学芸課長

EVENT REPORT 03 対談:磯崎新×横尾忠則

2014年12月16日(火) 15:00-16:30 | 当館 オープンスタジオ(1F)



おふたりともオシャレです

本来この対談は、同時期に東京のワタリウム美術館で開催されていた「磯崎新 12×5=60」展の関連イベントとして構想されたものです。ところが、横尾さんの体調がかんばしくなく、延び延びになっていたところ、11月に入ってようやく復調したため、磯崎さんの提案により、当館で対話が実現するはこびとなりました。

わが国を代表する建築家と美術家との貴重な対談にエキサイトしながらも、急なことで十分な広報期間がとれず、平日開催ということもあり、お客様に来ていただけるか一抹の不安がありました。しかし、いざふたを開けてみると、会場のオープンスタジオは立ち見が出るほどの盛況となりました。横尾さんが当館に来られるのも実に5ヶ月ぶり。主役を迎えた美術館はやはり活気が違います。

事前の打合せもなかったのに、磯崎さんが設計を手がけた西脇市岡之山美術館(1984)や横尾さんのアトリエ(1986)のほか、Tokyo Form and Spirit展(1986、ウォーカー・アート・センター。横尾さんの陶板作品に磯崎さんがデザインしたフレームを設置するとともに空間全体を構成)など、お二人のコラボレーションの資料画像をいちおう用意したのですが、話題はいきなり60年代に。1967年、磯崎さんと横尾さんが入れ違うように相次いでサイケデリック・ムーブメント絶頂期のニューヨークを体験したこと。1970年の大阪万博の際、「お祭り広場」のロボット等の制作に関わった磯崎さんからみて、横尾さんがデザインした「せいじ館」が、いかに破格の建築であったかなど、興味深い話題のオンパレードです。

現在78歳の横尾さんと83歳の磯崎さん、とても後期高齢者どうしとは思えない、機智に富んだ素敵な対談の様子は「週刊読書人」1月30日号で詳しくレポートされています。ぜひあわせてご覧ください。

山本淳夫 | 本館学芸課長



平日の日中にも関わらず、大盛況となりました

Editors' Choice MUSEUM SHOP・アーカイブルーム

MUSEUM SHOP 定休日:休館日に同じ Tel:078 855 5697



横尾さんデザインによる『浦島64』のジャケット

公開制作での飛び入りライブや、企画展『横尾忠則の「昭和NIPPON」』でのライブが大好評だったあがた森魚さんが昨年の12月にアルバムを発表されました。タイトルは『浦島64』。横尾さんの《300年の宴》(1996年、東京都現代美術館寄託)がジャケットデザインに用いられています。このアルバム誕生のきっかけは、実は当館なのです!大好きだったこの作品と、あがたさんが当館で再会

2012年の飛び入りライブは大盛り上がりでした!



したことで、イメージネーションが掻き立てられたそうです。ライブで初演された「横尾さんの美術館」も収録されています。

さらに当館で2度もライブをして下さった細野晴臣さんや、あがたさん監督の映画「僕は天使ぢやないよ」で横尾さんと共演した緑魔子さんも参加しているなど、超豪華仕様。まさに必聴です!

作花麻帆 | 本館学芸員補助



あがたさんが《300年の宴》と再会した企画展「反復復反復」の展示風景

アーカイブルーム



《XMAS PARADISE(東急百貨店)》スケッチ 作家蔵 画面全体に舞う蝶は、完成作品では何になっているでしょうか。



《XMAS PARADISE(東急百貨店)》(Wonderland(自主制作))等の作品素材、作家蔵



《XMAS PARADISE(東急百貨店)》1971 作家蔵(横尾忠則現代美術館寄託)

アーカイブルームでは「大涅槃展」開催中、《XMAS PARADISE(東急百貨店)》や《Wonderland(自主制作)》などの出品作品関連資料を紹介しました。様々な魚や鳥・昆虫の図鑑、コミック、洋雑誌などの頁の切り抜きは、制作に用いられた素材類です。指示の書き込まれたトレーシングペーパーが付いているものもあり、作品中に登場するモチーフがそこかしこに。そしてスケッチからは横尾さんの筆さばきだけでなく、この段階で画面全体のイメージが固まっていたこと、完成までにモチーフの入れ替えなどの調整がなされたことがうかがえます。アーカイブ資料により、横尾さんの細やかで遊び心ある創作の片鱗を見ることができるようになりました。

奥野雅子 | 本館学芸員補助